

兵庫・藤江別所遺跡
ふじえべっしょ

- 1 所在地 兵庫県明石市藤江字別所
- 2 調査期間 一九九三年(平5)一〇月～一九九四年三月
- 3 発掘機関 明石市教育委員会
- 4 調査担当者 稲原昭嘉
- 5 遺跡の種類 集落跡
- 6 遺跡の年代 三世紀～一六世紀
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

藤江別所遺跡は、明石市の西部に広がる中段段丘を刻んで流れる藤江川下流左岸の沖積地上に立地する。遺跡の標高は約一・〇～二

・〇mである。遺跡の北東三〇mの台地上には御崎神社(山王神社)がある。この御崎神社は『播磨国内鎮守大小明神社記』(播磨国内神名帳)に見える丹生葛江明神のこととされている。往昔山王権現二一社の諸神が鉄船に乗りこの浦に着船し

たが、里の女がこの神船に乗ったため女人の穢により鉄船が沈んだという言い伝えが残されている。また、周辺は「鉄船の森」と呼ばれ、鉄船が沈んだところから、赤い鉄気の水が湧き出したといわれている。

調査区からは、溝二条と井戸一基が検出された。

溝は、調査区の北端から二条に分岐する。一条は段丘の裾部を取り囲むように北から南へ走る幅四m、深さ五〇cmの溝で、他の一条は南西方向へ走る幅五m、深さ四〇cmの溝である。溝の埋土はシルト質土で、植物遺体を多く含んでいた。埋土および溝の肩付近からは弥生時代後期の土器がまとまって出土している。

井戸は、調査区西南端で検出された。掘形の形状は円形を呈し、すり鉢状に掘った後、さらにその下部を円筒状に掘り込んでいる。井壁を保護する設備はもたない。円筒状になった穴の径は三・三mで深さは一・九mである。検出面から井戸の底部までは約三・五mで、底部の標高はマイナス二・〇mであった。埋土は河川の氾濫により堆積した礫混じりの粗い砂である。底部付近の粘土層と砂層との境からは水が湧き出していた。

埋土の下部からは弥生時代後期の甕・壺が数個体ほぼ完全な形で出土している。それより上層からは土師器の甕・壺、須恵器の壺・甕とともに車輪石・銅鏡・滑石製勾玉・銅鍔がみつかった。木簡とともに上層からは古代から近世にかけての遺物も多量に出土した。木

筒が出土したのはこの層である。古代の土器の中には、底に「南家」などの墨書を施したのものもある。また中世の遺物には木筒のほか、桃の種も認められた。

車輪石は、長さ二・二cm、幅一・〇cm、厚さ一・五cmで中央に直径六・五cmの円形の孔が開いている。重さは一八六gを量る。

石材は和歌山県南部から四国の中央部付近にかけて産出する緑泥片岩であると思われる。形態上から、四世紀末から五世紀初頭に作られたものと考えられる。

銅鏡は九面出土した。素文鏡が四面、櫛歯文鏡三面、珠文鏡二面で、面径は三・〇cmから六・五cmまでの小型鏡である。縁は平縁で鏡の鈕の部分には紐通しの孔があいている。鏡質は良好である。

伴出した古墳時代前期から後期までの土器の中には口縁部の一部が欠けていたり、側面に孔が開けられたりしているものが認められる。

以上のことから、この井戸が祭祀に関わるものであることが明らかである。しかもこの祭祀は弥生時代後期から江戸時代初めまでの長期間にわたり連続して行なわれていたことがわかった。とくに井戸内から車輪石が出土したことは、この井泉祭祀に当地域の有力首長が関わっていたことを示すものとして興味深い事例である。また、先述の「鉄船」伝承の残されている御崎神社の存在もこの祭祀との関連を窺わせる。

なお、この井戸の周囲を取り囲むように弥生時代後期を中心とする土器がまとまって出土している。

8 木筒の積文・内容

- (1) 「梵字」南無× (221)×23×2 061
(2) 「梵字」○奉転読仁王般若波× (164)×69×4 011
(3) 「□□」 231×42×3 011

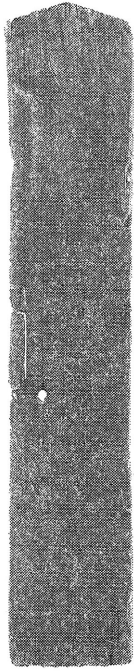
(1)は、頭部を五輪塔状に削り出した笹塔婆である。下端が欠損しており、片面に墨書がある。(2)は、頭部を山形にした転読札である。上部に四カ所穴が穿たれており、片面に墨書がある。下端は二次的に切断されている。(3)は、頭部を山形にした札である。胴部中央やや左寄りに穴が一カ所穿たれている。片面に墨痕が認められたが、文字は判読できない。

これらの木筒は、いずれも井戸の上層部から出土した。時期的には南北朝期に属し、先述の井泉祭祀に関わるものであると考えられる。

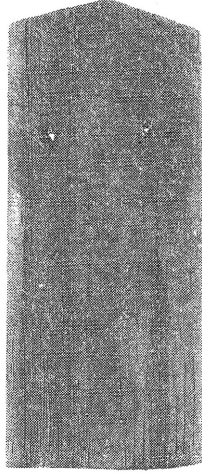
なお、木筒の積読に際しては、奈良国立文化財研究所館野和己・寺崎保広・渡辺晃宏各氏のご教示を得た。

(稲原昭嘉)

1993年出土の木簡



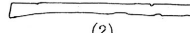
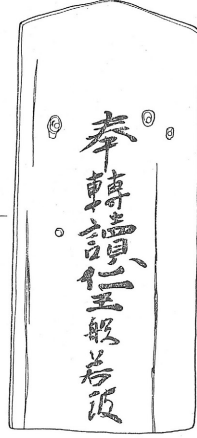
(3)



(2)



(1)



(2)



(1)